

滑稽俳句修業 (三)

東 良子

◆擬人化の対象に敬意をもつが「第九の扉」

八木会長の句に「海原をもちあげてゐる鯨かな」があります。私はこの句に「鯨への尊敬」を感じます。擬人化から始まって敬意をもつことで作者の意識が明確になります。「海原を持ち上げる」力の強さに敬意を感じたからこそこの句だと思えます。

蝸牛生まれながらの家主なり 良子

「蝸牛」一戸建てのマイホームに住んでいる。しかも生まれながらです。ここで「生まれながら」と「家主」を思いついたとき滑稽になったように思えます。対象に敬意を持つことで生まれた句に

勝独楽に絶える間も無きかすり傷 良子

傷だらけになりながら連戦連勝をしている「勝独楽」への敬意です。強いものへの憧れです。傷を負いながらの戦いに人間臭さを感じます。

◆つぶやきという個人的な思いが「第十の扉」

俳句は精神の記録ツールであると八木会長は書いています。そしてその方法として「つぶやく」をあげています。八木会長の句に「お花見はお見合いだつたかも知れぬ」があります。「春一番きつとさうだと思ったの」も呟きの句です。会長の呟きの句の最右翼は「かき氷どの部分から崩さうか」でしょう。

春風や靴下履こうか履くまいか 良子

見渡せば女子のをらぬ花筵 良子

第十の扉を押し開けば滑稽俳句はいくらでも出来そうな気がするのが不思議です。

◆万物を掌に載せてみるが「第十一の扉」

俳句と川柳の違いは、俳句が直感であるのに対して、川柳は思考力を働かせるところにあると思いますが、滑稽句の場合、直感にいくらかの思考をめぐらせることで「ひねり」が可能となります。「直感」プラス「ひねり」こそが、滑稽を生むのではないのでしょうか。本論を締めくくるにあたり、その「プラスひねり」を試みたいと思います。

猪垣の高圧電流人に効く

良子

猪の侵入を防ぐための電線に人間が感電した痛ましい事故がありました。高圧電流では猪もたまったものではありません。この事件は決して滑稽ではありませんが、人間が感電したことを知った猪の立場で言うなら、安堵の胸を撫でろしたということです。擬人化こそ滑稽の技であるとの八木会長が、どのようにこの句を評価されるか。文芸に必ずしもヒューマニズムは必要としないから「了」とされるのではないのでしょうか。

瓜坊をペットの宿の牡丹鍋

良子

「瓜坊」は猪の子どもで、とても可愛いから「ペット」にすることも多い。ところが瓜坊をペットにしている宿の名物が「牡丹鍋」というわけで、この滑稽は人間が地球上のここかしこで繰り返しているものの一つです。地球温暖化を防ぐ大会を冷暖房完備の会議室で開催したり、シリアを爆撃したあとで復興支援の資金を拠出したり、と枚挙にいとまがない。

◆滑稽は逆転の発想で決めるが「第十二の扉」

つまり、決論は意外であるほど面白いから常識を覆せば即滑稽となります。

振花の振ぢれ振ぢれて褒めらるる

良子

振ぢれは人間の場合は「ひねくれ」ですが、「花」の場合は、その「ひねくれ」が命題なのです。人間の発想を植物に当てはめることで、逆転の滑稽が生じるのです。

一番の長老となり屑金魚

良子

この屑金魚も「思いがけない」長寿に面食らっているのです。屑ゆえに貰い手もなく長寿とは、滑稽の王様とも言え、まさに「塞翁が馬」です。(完)